

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 動物応用科学科

職階 准教授

氏名 山本 誉士

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

主に野生動物学分野に関わる教育・研究活動に従事し、2025年度は学部で14科目、大学院で4科目を担当した。教育においては単に知識を教えることのみならず、学生自身が考える力を培うことで、課題解決に対する応用力に繋がるように意識している。また、野生動物学野外演習や卒業論文では、野外フィールドで動物たちが生きている環境に実際に身を置くことで、座学で学んだ知識を学生達が実感できる機会をもてるように努めている。加えて、近年ではデータ解析や統計に関する教育にも積極的に携わっている。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
基礎野生動物学	動物応用科学科	必修	2	140
野生動物学	動物応用科学科	選択	3	99
動物応用科学概論	動物応用科学科	必修	1	137
いのちの共生論	動物応用科学科	必修	1	137
野生動物学野外演習	動物応用科学科	選択	3	61
進化・分類学	動物応用科学科	選択	2	46
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3	9
科学の伝達	動物応用科学科	選択	4	8
インターンシップ	動物応用科学科	選択	3	87
動物応用科学実習	動物応用科学科	必修	1	138
サイエンスリテラシーⅡ	動物応用科学科	必修	1	139
動物共生科学特別研究Ⅱ-Ⅰ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	選択	1	4
獣医学特論Ⅱ	獣医学科	必修	6	2
卒業論文	獣医学科	必修	6	2
卒業論文	動物応用科学科	必修	4	8
保全生態学特論Ⅱ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	選択	1	5
保全生態学特論Ⅱ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	選択	2	3
保全生態学特論Ⅰ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	選択	2	3
地球共生系データサイエンス・同演習Ⅰ	動物応用科学科	自由	2	17

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

教育では、物事に対して「なぜ？」と考える追求心や探究心を持った人材の育成を目標としている。特に、近年ではインターネットやChatGPTをはじめとしたAIで調べることが容易に答えを得ることができる一方、表面的もしくは雑学レベルの知識習得に留まることが多いと感じている。物事の理由やメカニズムといった本質まで理解することで応用力に繋がり、疑問に思うことで新たな気付きが生まれる。そのようなサイクルを習慣化することで、多角的かつ多面的に物事の繋がりを意識することができ、自主的な学習姿勢および幅広いかつ実践的な知識・技術の獲得に繋がると期待している。また、一部の授業では大学構内にある博物館を活用し、実際に標本を見ながら解説することで、座学で学んだ知識の昇華を試みている。

研究においても、調査が単なる作業にならないよう、なぜそれを調べているのか、それを調べることがどのように分野に貢献するのかなどを常に考えるよう促すことで、物事を俯瞰する意識の涵養に努めている。また、野生動物の研究は一人では実施することが難しく、現地の人々をはじめとした様々な協力が必要不可欠である。そのことを私自身の体験談を交えて説明し、何事においても人に対して真摯であることの重要性を理解し、実践してほしいと考えている。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

大学では一般教養や専門分野に関する幅広い知識を学ぶが、それぞれの知識を多角的・多面的に関連づけて考え、課題解決に応用するためには、単なる暗記に留まらない「理解」が必要である。そこで、授業や実習では学生に問いかけることで物事に対して疑問をもつ姿勢を示すとともに、少し冗長になってしまうこともあるかもしれないが、現象の理由やメカニズムなどについて詳しく説明するように努めている。疑問を持つことで物事を深く理解することができ、そこからまた新たな疑問が生じる。そのサイクルを楽しむことができれば、自主的な学びに繋がると期待している。特に、実習や卒業研究で野外フィールド等に出た際には、課題を与えずに自然や動物をゆっくり眺めてもらう時間を学生に与えることで、自身で様々な不思議や疑問に気付くことができる機会を意識して取り入れている。

また、可能な限り学生と日常的にコミュニケーションをとるように努めている。教員との信頼関係を築くことで、間違えた回答や議論することを恐れず、学生の自由で柔軟な考え方を促すことができると感じている。そして、質問や疑問に対して単に答えを与えたり、正したりするのではなく、まずは学生自身の考えを引き出し、一緒に答えを導き出すことで達成感や自己肯定感を高めていきたいと思っている。考えるという作業は最初の頃はとても大変で難しいことである。しかし、それを乗り越えることができれば、きっとどのような分野の業種においても、彼らが活躍していく力の一つになると信じている。一方、私自身も学生の模範となれるよう、常に考えることを楽しみながら研究や教育に取り組む姿勢を心掛けている。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

授業では唯一の回答があるわけではない問題をアンケート等で掲示し、類似回答をいくつかに分類して、それらについてみんなで考える機会を設けている。一方、100人を超える授業でのグループディスカッションについては、成功事例などを参考にして今後検討・導入していきたいと考えている。近年では学生もリモートツールにも慣れており、オンライン上でグループを作成して議論するなど、いくつかの実践可能性を感じている。また、授業以外にもRソフトウェアの使い方に関する自主ゼミを企画して学びを支援することに加え、学生達で互いに教え合うことで理解が深まるように取り組んでいる。

(2) ICTの教育活用

有

授業資料にワンクリックURLやQRコードを埋め込むことで、内容についてさらに深く学べる情報や関連動画を掲載している。また、オンライン匿名質問ツールを活用し、授業中にリアルタイムで学生が質問できるように工夫している。さらに、事前に授業資料、事後には授業動画をAzaMoodleにアップロードすることで、予習と復習ができるように努めている。一方、学生とのやり取りにはGoogleチャットなどを積極的に活用し、より気軽に学生が質問しやすくなるように取り組んでいる。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

授業資料は可能な限り文字を少なくし、重要なポイントを強調するなど、視覚的に見やすくなるように努めている。また、授業時間だけでは説明しきれない部分の補足もしくはさらに深く学びたい学生のために、資料を別に作成し、Google driveの共有リンクを資料に貼り付けることで充実した学びを提供している。さらに、一方的に聞いているだけの受け身の授業にならないように、配布資料の随所を空白にして、授業を聞きながら書き込むことで資料が完成するように工夫している。そして、毎回の授業は録画し、必ずAzaMoodleにアップロードすることで復習できるようにしている。

授業開始直後は学生も集中力がないため、最初にアイスブレイクとして当該回の授業に関する時事ネタや最新の話題などを話している。なお、メリハリをつけるため、時限間の休憩は必ず取ることに加え、集中が途切れていそうな時には適宜数分間のストレッチ休憩を取り入れている。また、どうしても長時間の集中は続かないため、理解度確認のための小テストや関連動画を効果的に活用している。

(2) 学生の理解度の把握

B

授業ではほぼ毎回Google formを活用した小テストを実施している。また、学生の回答結果（匿名）を授業内でフィードバックすることで、全体的な理解度を共有し、各自が全体と比較した自身の状況を把握できるようにしている。一方、小テストの正解率に応じた個別の学生ケアまでは実施できておらず、今後は適宜、個別の補足指導を検討している。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

B

関連する情報や補足資料、動画など、授業資料に埋め込みURLおよびQRコードを掲載することで、授業内容について一歩進んで学べる機会を提供している。ワンクリックで容易に情報にアクセスすることができることから、学生も積極的にリンク先の内容を確認してくれているようである。しかし、授業評価アンケートでは授業時間外学習が少ない学生も一定数いたため、補足資料も含めて授業が完成するように期末試験や課題を出す工夫の必要性を感じている。

(4) 学生とのコミュニケーション

B

疑問を持ったまま授業が進行しないよう、匿名質問ツールを活用し、授業に関する質問を学生がリアルタイムで投稿し、随時回答するようにしている。また、課題に対する学生の回答例や質問の一部は翌週の授業開始時に取り上げて詳しく解説することで、参加意識を持ってもらうようにしている。実際に、きちんと質問に対応してくれたことが嬉しくてモチベーションが上がったとの感想を得ている。授業時間外の質問に関しては、対面やメール、AzaMoodleへの回答掲載で随時対応しており、リスポンスがあることで学生からの質問が積極的であった。一方、理解度が芳しくないが、積極的に質問してくれない学生とのコミュニケーション方法については、今後検討する必要があると感じている。

(5) 双方向授業への工夫

B

匿名質問ツールを活用することで、講義が一方的にならないように工夫している。だが、人前で発言をすることも重要であると考えため、こちらから学生に問いかけるなど、今後はより活発に学生が発言や口頭質問をできるように工夫して取り組んでいきたい。

(6) 国家試験対策の取組 (獣医学科・臨床検査技術学科)



該当なし

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

概ね高評価であった。特に、匿名質問ツールを活用することで、授業中にリアルタイムで質問ができる点は学生に好評であった。一方、少し説明のスピードが早いという意見があった。この点については自分自身でも自覚があったため、以後の授業では話す速度を遅くするとともに、次のスライドに行く前に少し間を置くように努めた。

(2) (1) の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

授業終了後に学生達に質問したところ、説明が早いという点は改善されているようである。今後も授業評価を参考にし、随時改善していきたい。

(3) (2) を踏まえた次年度の取組

基本的には今年度の方法を継続するが、新たな学習支援ツールや効果的な教育方法について調べ、学生の修学度向上に務めていきたい。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

以前に、教員とコミュニケーションを取ることで授業への参加意識が高まり、成績が向上した例があった。そこで、授業に関しては、小テストの結果から成績の芳しくない学生を把握し、まずは授業前後に積極的に話しかけることでコミュニケーションを取りたいと考えている。そして、彼らが抱えている問題や課題の理解に努めたい。また、他の教員に実践方法を聞くことで、積極的に対策を取り入れていきたい。

卒業研究に関しては、専門ゼミは毎週実施しているものの、研究室生の人数が多いため、各人の発表機会が少ない。今後はより積極的に学生とコミュニケーションを取って現状を把握し、それぞれに達成可能な課題を与えることで、当事者意識と計画的に物事に取り組む意識を培っていきたいと考えている。

(2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

以下に2025年度前期の授業評価から一部抜粋したものを掲載する。また、同僚の教員からも、授業に対する学生の評判が好評であると伝え聞いている。今後もさらなる満足度の向上を目指したい。

- ・ 授業に関連する研究論文が提示されていて、興味のあることに対して理解を深めることに非常に有効的だった
- ・ 動物の動画があって理解しやすかった。また、資料の写真が沢山あってみやすかった
- ・ お話がわかりやすかった
- ・ スライドの説明だけではなく授業を理解できているか講義中に質問してきたり、問題を解く時間が確保されていた
- ・ 授業スライドに実際の写真や動画が載っており理解しやすかった
- ・ 動物の行動について更に興味を持った
- ・ この大学に入って獣医師だけではない色々な道を教えてくださった
- ・ 改めて野生動物の魅力について学ぶことができた
- ・ 面白い授業をしてくださりありがとうございました

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

大学で開催されるFD研修会等には積極的に参加していることに加え、様々な学習方法や学習支援ツールについて情報収集することで、指導力向上に努めている。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

授業や研究指導において、単に回答を与えるのではなく、学生自身が考えて解決策や意義の理解に達するよう誘導し、論理的思考力の習得およびその楽しさを実感できるように努めたい。そのような地力を培うことで、学生が様々な分野の社会で活躍できる人材になるように願っている。

一方、クラス担任をはじめとした様々な業務があるため、落ち着いて研究に取り組む時間の確保が難しいことがある。自身の研究にもしっかりと取り組み、その一部を学生と一緒に実施することで、彼らの研究力も培っていきたい。また、最新の研究成果の授業・教育への還元に加え、私自身が分野を開拓することで、学生の卒業後の進路を切り開いていきたいと考えている。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

特になし。